

【夜明け編】

アルバがカタカタと仕事をしている。
リールがコーヒーを持ってくる。

リール 「コーヒーここ置いておくよ」

アルバ 「ん」

リール 「根詰めすぎじゃないの？」

アルバ 「ん」

リール 「…(笑)聞いてないでしょ」

アルバ 「聞いている」

リール 「お」

アルバ 「(コーヒーを一口飲む)…ん。うまい」

リール 「よかった」

アルバ 「試作品できたよ」

リール 「あ、開発中だって言ってたチップ？」

アルバ 「(うなづく)」

リール 「チップの中に何かすごいのが入ってるんだよね？」

アルバ 「…何か、すごい…?(笑)」

リール 「…専門的なことは全然わかんないから」

アルバ

「簡単に言うと、体の中をできるだけ早く元の状態に戻す…ための工夫っていうか…。
病原菌にしろ、試す薬にしろ、体にとってみたら外から意図的に注入されたものだろう？
それを、中和するために必要な調整をチップが判断するというか…ま、そういうこと。
これでA B O達の負担がかなり減るはずだ」

リール 「…:(じーつと見る)」

アルバ 「何？」

リール 「アルバは本当にすごいなあ」

アルバ 「データ管理をリールに任せられているのが大きいよ。その分俺が好きに動けるから」

リール 「(わざと敬礼して) 本日も、特に異常なし」

アルバ 「(笑)…リールはさ、やつと外に出たのに俺たちのサポートでいいのか？ 他に」

リール 「自分に…、何かできることがあるのがとっても嬉しい。それもA B Oの為にできるこ
とがあるなんて」

アルバ 「…そうか」

リール 「僕だけじゃない。みんな感謝してるよ。…チ…ム…リ…ヒ…トに」

アルバ 「(笑)チームリヒト…ねえ。本当何なんだろうな。あのよくわからんカリスマ性」

リール 「よくわからんって…(笑)」

アルバ 「どうして俺は、あいつについていこうって思ったのか…」

リール 「…(笑)。どうして？」

アルバ 「最初の印象が最悪だったってのは覚えてるんだけどな」
 リール 「最悪？」
 アルバ 「超：最悪」
 リール 「：ねえ、聞きたい。チームリヒトの結成秘話!!」
 アルバ 「え？」
 リール 「教えてよ」

オーブ、リヒトが現れる。

アルバ 「：俺と」
 オーブ 「俺と：」
 リヒト 「俺の：出会い」
 ナイト 「おい。俺のことも忘れんなよ」
 リヒト 「凶暴なくせに脱走者殺せなくて鳴いてた捨て猫を拾った話か？」
 オーブ 「そう。めっちゃエンゲル係数高い子猫ちゃんね」
 ナイト 「ピースして、リールにアピール」
 リール 「めっちゃピースしてくる：(笑)」
 アルバ 「(リールに) そんなに聞きたい？」
 リール 「(うなずいて) 聞きたい!」

(いつの間にか他の登場人物たちも取り囲んでいて、一同うなずく)

アルバ 「(リヒトに) だつてさ」
 リヒト 「いーじゃねーか。話してやれよ。俺たちの：出会いの話」

突如始まるオーブニング。

【夜明けM1】 Re:trigger

欲しいものはナニ？
 聞かないで 聞かないで
 与えてくれないなら聞かないで
 ここにいるイミ
 知らない 知らない
 教えて欲しくもない 黙ってよ

産声を上げたのがハジマリ
 僕も俺も君もあなたも
 吸い込んだ空気
 眩しすぎる光

生きる絶望を知って
泣いたんだ

この船に 乗せたいのは…ダレ？
オレじゃない キミじゃない /ダレ？
来るかもわからない大洪水
この船で 救いたいのは…ナニ？
ララバイ ララバイ
レクイエムにも似ている 子守歌

Re:trigger

終わりは始まりの合図

Re:trigger

引き金は君の手の——ナカ

銃声の音を皮切りに雨の音。
しばらく続き、やがて止む。

何かを待っている様子のアルバとオーブ。
過去の姿：アルバは黒縁の眼鏡をしている。オーブは眼帯無し。

アルバ 「遅くないか？」

オーブ 「遅いね」

アルバ 「もう2時間だぞ」

オーブ 「そうだね」

アルバはイライラが隠せない様子。

オーブ 「ねえ。少し落ち着いたら？」

アルバ 「仕事が溜まってるんだよ。…っていうか脱走者の後始末ならオーブだけで十分だろう？ なんで俺まで」

オーブ 「なんでだろうね」

アルバ 「…（ため息）」

オーブ 「ねえ」

アルバ 「なんだ」

オーブ 「さっき、虹がかかってたんだよ。見た？」

アルバ 「いや」

オーブ 「綺麗だったよー。すぐに消えちゃったけど」

アルバ 「そうか」

オーブ 「ねえ」

アルバ 「なんだよ」

オーブ 「俺…後始末嫌い」

アルバ 「……」

オーブ 「おとなしく逃がしてあげればいいのに」

アルバ 「……」

オーブ 「なーんて。…埋め込む作業も好きじゃないけど」

アルバ 「じゃあ辞めるか？」

オーブ 「…うーん」

アルバ 「お前の腕は確かだよ。アイツら…A B O達にとって一番苦痛が少なくて済んでる」

オーブ 「じゃ、辞めない」

アルバ、静かに笑う。

ノックの音。

アルバ 「やっと来たか」

オーブ 「やっと来たね」

入ってくるリヒト。(A B O衣裳)

ストップモーション。アルバモノローク。

アルバ 「俺もオーブも、トリガーで逃げたA B Oの…死体が運ばれてくるって疑ってなかった

んだ。でもやってきたのは…」

リヒト、面倒くさそうに顎だけで会釈する。

リヒト 「ここのチップ外して本部に提出したら、自由になれるって聞いてきたんだけど…」

アルバ・オーブ 「……」

目を見合わせる二人。

アルバ 「ずぶ濡れのその生意気そうなあいつとの出会いは…、ま、最悪だったわけ」

場面が変わる。(アルバははける)

向かい合って座っているオーブとリヒト。

リヒトのこめかみにガーゼ。(バーコードはない)

オーブ 「でさ、君に俺らのことを教えた人って、…Z:イベントだよな？ 違う？ ね？」

リヒト 「……」

オーブ 「うーん。こういうことしそうな人他に知らないんだけどなあ…。(リヒトのこめかみに触れて) チップはちゃんと本部に提出したから君は死んだことになった。だから自由。

…それはそうなんだけども。その先のことは何も言われてないの？ どこに行け、とか」

リヒト 「…(首を小さくふる)」

オーブ 「うーん。行くところあるわけ…ないよね。一人外に出て行ったところで…なあ…」

リヒト 「……」(じーっと見つめる)

オーブ 「ん？ 何？ 腹減った？」

リヒト 「……」(見つめたまま)

オーブ 「何？ 具合でも悪い？」

リヒト 「……」

リヒト、ふと視線をそらし俯く。

オーブ 「…出ていけ、なんて言わないよ。…言えないよ」

リヒト 「……」(見つめる)

オーブ 「だからさ。名前教えて」

アルバ、浮かび上がる。

アルバ 「はあ？ うちに置くことにした？」

オーブ 「うん」

アルバ 「本部に死んだって嘘の報告してる時点で結構危ういってのにその上」

オーブ 「危ういのはさ…。始めからじゃん？」

アルバ 「…それは…。(ため息)…でもバレたらどうする」

オーブ 「ノンノン プロブレム。ぱっちりお目以外は変身済みだから♪」

アルバ 「!! まじか」

オーブ 「…リヒト君って言うんだって」

アルバ 「……？」

オーブ 「数字じゃなくて、アイツとかあの子とかじゃなくて…、ちゃんと名前で呼べるのうれ
しいって思っちゃった」

アルバ 「でも、ABOはABOだ」

オーブ 「…うん。でも、リヒト君」

アルバ 「(ため息)勝手にしろ」

オーブ 「OKってことだね♪」

アルバ 「勝手に、しろ」

オーブ 「勝手にする!!」

アルバのモノローグ。

アルバ 「そして、あいつ（オーブが睨んでくるので仕方なく言い直す）…リヒトは、実にふてぶてしく、ふてぶてしく（あえて二回言う）…なっていた」

オーブ 「でも、俺もアルバも超優秀な助手ができてよかったんじゃない？」

アルバ 「生意気で可愛くはないけど、オーブの言う通りリヒトは、むかつくくらい優秀だった」

場面が変わる。

【夜明けM2】 Noah - s Ark (インスタ)

浮かび上がるリヒト。（ガーゼは取れている）

聖書は持っていないが、ぶつぶつと呪文のように…。

リヒト 「神様は、ノアに言いました。

『大きな方舟を作りなさい。

間もなく大洪水が起きて、全世界が滅びるでしょう』

ノアは神様を信じて、方舟――Ark（アーク）を作りました」

そこにオーブがやってくるが、しばらく様子を見ている。

リヒト

「方舟を作り始めたノアのことを人々は笑いました。

神のお告げのことを話しても、誰も信じる者はいませんでした。

それでもノアは、神様を信じて方舟を作りました。

なぜならノアには、助けたい人がいたのです」

オーブ

「聖書暗記してんの？ やっぱリヒト君って変わってんねえ」

リヒト

「……」

オーブ

「好きなの？ ノアの方舟」

睨むように一瞥して去ろうとするリヒト。

オーブ

「仕事、だよ。【第3アーク】からの脱走だって」

リヒト

「第3…」

オーブ 「リヒト君も確か第3だったよね？ 今のハンター君めっちゃ優秀だからすぐにかまると思うよ」

リヒト、走って去る。

オーブ

「え？ おーい。リヒトくん??」

場面が変わる。

脱走したA B Oを捕まえ、気絶させるナイト。(相手はマイム)

とどめを刺そうとして…、ためらう。

ナイトの、モノローグ。

ナイト 「脱走したA B Oを捕まえるのが俺の仕事。…いや、正確に言えば、そのA B Oを殺すのが…、俺の仕事」

リヒト 「何ためらってんだよ」

ナイト 「…!!!」

ナイト、身構える。

リヒト 「トリガーでは皆殺ししたんだろ？ だから、今ハンターやってんだもんな」
ナイト 「…」

ナイトは臨戦態勢のまま。

リヒトは臆することなくナイトに近づく。

足元の気絶しているA B O (いないけど)を一瞥し、踵を返す。

リヒト 「ついて来いよ」

ナイト 「…」

リヒト 「そいつ、忘れんなよ」

リヒト、さっさと行ってしまう。

ナイト 「え？…おい」

アルバとオーブが浮かび上がる。

アルバ 「ハンターは顔を明かさないのでがルール。だから俺たちもその時が初めてだった」
オーブ 「まだ生きてるA B Oを抱えたナイト君との、『はじめまして』」

ナイトが、小さく会釈をする。

アルバ 「ま、これがチームリヒトの始まり、だな」
オーブ 「(笑)チームなんて意識最初はなかったけどね」

リヒト 「逃げ出したA B Oをこいつが捕まえて、こいつらの元に連れてくる。チップを取り出して本部へ提出すれば、晴れて自由！」
オーブ 「その後のケアまではできないけど」

リヒト 「自由になったのは間違いねえだろ？」

オーブ 「バレたらやっぱいけどねえ」

リヒト 「バレるわけねえ…（アルバに）だろ？」

アルバ 「俺を誰だと思ってるの？」

オーブ 「ひゅ〜♪」

ナイト 「みんな、脱走してきたらいいのに…」

オーブ 「…（笑）確かにねえ」

ナイト 「俺、頭いいほうじゃねーからわかんねーけどさ、なんか方法あんじゃねーの？ お前から見てっと、なんかすっげーことできる気がすんだけど…」

3人 「……」

リヒトのモノローグ。

場面が変わる。（オーブとアルバでナイトを着替えさせる？）

リヒト 「…なーんて、かわいーこと言い出したナイト君は、たまに悪夢ってやつにうなされていた。

…わかんなくもねえ。俺もたまに見る。でも夢じゃない。あれは…本当にあったことだ。

…死に際に醜く足掻く人間を見世物にしたショー。その先に自由なんて存在しない。

『トリガー』…」

【夜明けM3】 ララバイ レクイエム

浮かび上がるナイト。（ABO姿）

（アーベント）「それでは…トリガー開始！」

必死に戦うナイト。

最後の一人に残る。

見守ることしかできないエレ。傍にはムスタ。

ナイトに渡される銃。

（アーベント）「空か？ 扉か？ 自分か？」

迷った末、扉に銃を向けるナイト。

リヒト 「トリガーの先には死しかない」

ナイトに銃を向けさせられるエレ。
カチリ。

リヒト 「外になんて出すわけない」

ガタガタと震えているエレ。に気づくナイト。

ナイト 「!!」

* あなたを追いかけた…

ナイト、扉に向けていた銃を自らのこめかみに銃を当て、引き金を引く。

エレが「ナイト!!」と叫ぶ（口パク）
ゆっくり倒れるナイト。

* この船に乗せたいのは…ダレ？

オレじゃない

キミじゃない / ダレ？

来るかもわからない大洪水

この船で救いたいのは…ナニ？

ララバイ ララバイ / ナニ？

レクイエムのような 子守歌

エレは去っていく。

リヒト 「だが―、ABOに渡される銃には二種類ある。実弾か麻酔か」

（アルバ）「戦う様子を見て判断される」

（オーブ）「そのABOが使えるかどうか」

リヒト 「脱走者の始末を任せられるかどうか」

*

ララバイ ララバイ

子守唄のような

ナイト 「（倒れたまま）俺は死んだはずだったのに…」

レクイエム

一瞬の暗転。（着替え直す？）

悪夢から目覚めるナイト。

ナイト 「はあっ…!!!!」

息が荒い。…それを落ち着かせるように目をつぶると、

【夜明けM4】 追憶

臉に浮かぶのは…あの人の背中。あの人が自分を呼ぶ…声。
別空間にエレ。

エレ 「ナイト」
ナイト 「……」

エレ 生まれたてのヒナの刷り込みのように
ナイト あなたを追いかけた
エレ 生まれたてのヒナが懐くように
ナイト あなたを追いかけた

ナイトのモノローグ。

ナイト 「俺は難しいことが苦手だったからさ、全部感覚。嫌なものは嫌。…きつと超めんどく
せー奴だったと思う。いわゆる問題児ってやつ？ ……なんでかなあ。そんな俺なのに、
あの人の背中追っかけるのは、めっちゃ楽しくて…それは、本当で…」

エレとナイト、見つめ合う。

二人 本能だけじゃ生きられないから
苦しい

エレが消える。

ナイト 「……」

いつの間にかそばにはリヒトたち。

リヒト 「ひっでえ顔」
ナイト 「は？ あんたが言う？」
リヒト 「なんだ、元気じゃねーか」
ナイト 「こんな時間に何？ 仕事？」
アルバ 「【第6アーク】から二名脱走」
ナイト 「第6…」
オーブ 「臓器専門のアークだよ。そりゃ逃げたくもなるよね」
ナイト 「二人か…。どっちか助っ人に来てくんね？ 多分一人じゃ運べねーから」
アルバ 「オーブが行くそうだ」
オーブ 「ねえ。なんでー？」
リヒト 「なあ…」

三人がリヒトに注目。
リヒトがにやりと笑っている。

リヒト 「いいこと考えたんだけど…聞きたい？」

3人 「……」

オーブ 「楽しそうだね。リヒト君。でも」

アルバ 「リヒトが楽しむとロクなことがない」

ナイト 「わかりて」

リヒト 「はあ？ 何言ってるんだよ。楽しんでナンボだろうが」

オーブ 「で？ 何する気？」

リヒト 「ぶっ潰す」

3人 「え？」

リヒト 「…全部、ぶっ潰す」

【夜明けM5】 Break down～よるのはなし～選ばれた者 生かされる場所

リヒト Break down

価値観ごとぶち壊せよ

吉と出るか凶と出るか

わかんねーからいいんだろ？

アルバ・オーブ 明日死ぬかもしれないから面白い

ナイト 神様なんていないから面白い

4人 Break down

Break down

リヒト、アルバの眼鏡を外して自分にかける。
場面が変わる。

点在するABOたち。

ABO

夜は必ず明けるなんて嘘

明けない夜しか知らない

ここにいたら ここにいたら…

僕（俺・私）たちはABO ——選ばれた者

ここはアーク

ムスタ・エレ ——彼らを

…生かす場所

A B O 達が一列に並ぶ。
ノアが登場。

ノア 「研究員としてここに配属になりました。ノアです。よろしくお願いします」

アルバとオーブが登場。
ムスタとエレによって二人が紹介されているのを背景に、
ノア（リヒト）とナイトの会話。

ナイト 「あの二人、マジでバレてねえ」

リヒトは淡々と報告書を読み上げるように言う。

リヒト 「【第6アーク】を脱走したA B O二人をハンターが保護。二人は大変反省をしております、戻ることを強く希望。しかし二人とも極度の鬱状態のため、元居たアークに戻ることは困難と思われる。上層部との相談の結果、【第17アーク】に移すことが賢明と判断」

ナイト 「そんなにうまくいくもん？」

リヒト 「いったからいーんじゃねーの？」

ナイト 「名前そのままでもいいのかよ？」

リヒト 「それはアルバからの提案だ」

アルバ 「A B Oを数値でしか判断していない奴らにバレる確率より、オーブが俺を本当の名前で呼ぶというミスを起こす確立の方が断然高い」

ナイト 「なるほどね」

オーブ 「あのさあ、俺の演技力舐めないでもらっていい？ 役作り完璧なんだからさあ！
変装もばっちりでしょーが！」

アルバ 「勝手に人の顔いじりやがって」

オーブ 「ちょこっただけじゃん。でも眼鏡外したらだいぶ印象違うから大丈夫だよん♪

ねえ、この眼帯どう？ 気合入れすぎちゃったかなあ？」

アルバ 「（ウサギを奪って）これは必要なのか？」

オーブ 「乱暴に扱わないでよー」

わいわいと去っていくアルバとオーブ。

リヒト 「とりあえず、潜入成功ってことで」

ナイト 「俺は？」

リヒト 「お前は切り札だからな。もうちょい待ってろ」

ナイト 「へーい」

去ろうとするリヒトに、

ナイト 「ねえ。なんで【第17アーク】なの？」

リヒト 「……」

ナイト 「もしかして」

リヒト 「オーバー20の成人男性専用のアークだからに決まってんだろ」

ナイト 「…そっか。…なあ、もう少し愛想よくしろよ。ノア研究員」

ノア 「…(笑)。私と同じくらい不愛想な人がもう一人、同僚にいますよ？」

ナイト 「ふーん」

ノア 「では、失礼します」

リヒト、去っていく。

ナイト 「よく、笑う人だったんだけどなあ…」

ナイト、去っていく。

暗転。

明転。

アルバがカタカタと仕事をしている。

リールがコーヒーを持ってくる。

リール 「コーヒーここ置いておくよ」

アルバ 「ん」

リール 「根詰めすぎじゃないの？」

アルバ 「ん」

リール 「…(笑)聞いてないでしょ」

アルバ 「聞ってる」

リール 「お」

アルバ 「(コーヒーを一口飲む)…ん。豆変えた？」

リール 「さすが超グルメ」

アルバ 「(ペロっと舌を出す)」

リール 「そうそう。これ、届いてた」(絵葉書を渡す)

アルバ 「絵葉書…？(宛名を見て)ノクトとホクか」

リール 「なんかあつちでノーチと合流するらしいよ。あの辺りはまだABOの受け入れ態勢が整ってないからね。大変みたい。でも、いろんなところ行ってみたいって言ってたからそれなりに楽しんでるんじゃないかな？」

アルバ 「結局みんな、ABO支援活動か…」

リール 「…感謝してるよ。本当に…。一度は解体寸前までいったプロジェクトArkが、こんな

風に建て直されていくなんて…本当にびっくりだけど」
「ぶっ潰したいって言ってたリヒトがむしろ先頭に立って…！！」

ふと、何かに気づくアルバ。

アルバ 「え…。まじ？」
リール 「どうしたの？」
アルバ 「…でもあいつならあり得るか」
リール 「？」
オーブ 「あり寄りのあり…ってか、あ・り！」
リール 「オーブおかえり」
オーブ 「今日シチュー？ めっちゃいい匂いすんだけど」
リール 「ああ！！ やばっ。火つけっぱなしかも！！」

リール、慌てて出ていく。
二人になる。

アルバ 「リヒトのやつ最初から…」
オーブ 「…俺、なんでそんなにノアの方舟好きなのか聞いたことあんだよね。そしたら…」

別空間にリヒトが浮かび上がる。

リヒト 「神様はどうして大洪水を起こしたと思う？
地上が人の悪で溢れかえって取り返しがつかなくなったから、それを一掃するためだ。
そう。ぶっ潰そうとしたんだよ。ゼー…んぶ！
そしてぶっ潰した後、生き残ったノアから新しい歴史が始まり…
人類は再生を果たしていく…」

…そこまでが、デフォなんだよ」

リヒト、消える。

アルバ 「だから、ノアプロジェクト…」
オーブ 「そゆこと」
アルバ 「なんかムカつく」
オーブ 「笑…あ、ねえ。のっぽ君がどっか行っちゃうって話」
アルバ 「ああ。本部に異動だそうだ」
オーブ 「ブリリアントなお魚さんってこと？」
アルバ 「…もしかして、出世魚って言いたい？」

オーブ
（正解！！）
アルバ
「そうなんじゃないか？」
オーブ
「のっぽ君やる〜♪」

リヒト登場。

リヒト
「あのエリート面で、マジでエリート街道まっしぐらとか、面白みに欠けてんな」
オーブ
「分かりやすいヒガミ（笑）」
リヒト
「ナイトは？」
オーブ
「そろそろ着いた頃かも」
リヒト
「ふーん」
オーブ
「ねえ、アルバ。通信って今できる？」
アルバ
「出来るけど？」
オーブ
「リヒト君、気になってるみたいだからさ」
リヒト
「はあ？」
オーブ
「のっぽ君にお餞別の言葉もかけたいって顔してるし」
リヒト
「殺すぞ」
アルバ
「はいはい。じゃ、繋げるぞ」
リヒト
「っ！！ おい」

鳴り響く着信音。浮かび上がるムスタとエレ。

ムスタ
「おや、ノア君久しぶり」
オーブ
「ノンノン！ 今はねえ、リヒト君！」
ムスタ
「ああ、そうでしたね。ちょうど君たちの話をしていたんですよ」
リヒト
「どうせ、ろくでもねー話だろ」
オーブ
「えー？ もしかして悪口〜？」
ムスタ
「昔話ですよ。ところで、急にどうしたんです？」
オーブ
「のっぽ君が自分探しの旅に出ちゃうって聞いたから」
アルバ
「本部への異動だ。Zはアーベントの補佐につくって…、説明しただろ」
オーブ
「なんか久々に顔見たいな〜ってリヒト君が」
リヒト
「はあ？ んなこと言ってねーだろ」
オーブ
「珍しく気にしてたじゃんよお」
リヒト
「してねー」
オーブ
「してたー！！」（揉める）
アルバ
「お前らやめろ」
ムスタ
「元気そうだなにより」
リヒト
「あんたも元気そうだな」
ムスタ
「検査行かないと怒られますから（笑）…他のみんなも元気ですか？」
リヒト
「さあな」

オーブ 「みんな元気だよ。リヒト君がしょっちゅう気にしてるから、アルバがこまめに連絡取ってくれてるの」

リヒト 「適切なこと言ってるじゃねーぞ…っぐ」

オーブ 「恥ずかしがらないの」(リヒトの口をウサギでふさぐ)

エレ 「ナイトは？…元気か？」

オーブ 「あれえ？ まだ着いてない？」

エレ・ムスタ 「え？」

アルバ 「開発中のチップの試作品ができて、イーリスに送るって話をしたら」

オーブ 「んじゃ俺が届けるー！！って走って行っちゃったんだけど？」

リヒト 「あいつ、方向音痴だからな…」

オーブ 「アークに侵入させるときも、迷いに迷って森の中でぶっ倒れてたしね」

アルバ 「とにかく…間もなくそちにナイトが」

そこにナイト背負ったイーリス登場。

イーリス 「所長…、エレ…」

エレ 「ナイト！！」

ナイト 「…腹…減って…死にそう…。なんか食わせ…ろ…」

イーリスの背中であつたナイト。を、支えるエレ。

【夜明けM6】 Judgment Day〜その光の名は自由

イーリスとリヒトの会話。(周りはストップ or 散っていく)

リヒト 「本部へ異動ってことはエリート街道まっしぐらってやつ？」

イーリス 「…自分で、志願したんですよ。あの人の補佐をしたいって」

リヒト 「物好きだねえ」

イーリス 「噂で聞いたんですけど、外へ出たA B O達を保護する組織が立ち上がったそうですね。

その名もノアプロジェクト」

リヒト 「へえ」

イーリス 「ご存知ないですか？」

リヒト 「さあな。…でも、いい名前じゃねーの」

イーリス 「え？」

リヒト 「知ってるか？ ノアって、『自由』って意味があんだぜ？」

*

Judgment Day…

光を知らなかった

Judgment Day…

黒い雲に覆われて

A B O たち

Day by Day

雨が洗い流す

見えない恐怖

雨が消し去る

抗えない運命

夜が明ける

その時は今

射し込む光

その光の名は

自由

まばゆい光が差し込む。

暗転。